

ダンジョンでゴブリン  
をスレイするのは間  
違っているだろうか

ポツキー イイイ！！！！！！

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゴブリンを殺す男と英雄に憧れ、かつての約束を果たそうとする少年の物語

# 目次

プログラグ

---

1



## プロローグ

『ヴヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!?』

「ほあああああああああああああああああああああつ!?」

僕は今、死にかけている。

具体的には牛頭人体のモンスター、『ミノタウロス』に追いかけている。

最初はゴブリンに追いかけてたんだけどなあ、と余裕がない中そんなことを考える。

しかしゴブリンはミノタウロスを恐れたか、もう僕の周りには居ない……もしか

したらちよつと離れたところに潜んでいるかもしれないが

『ヴウムウンツ!!』

「くっ!?!」

ミノタウロスの蹄。

背後からの一撃は体を捉えることこそしなかったものの、土の地面を砕き、ちようど僕の足場も巻き込んだ。

足をとられ、ごろごろとダンジョンの床を転がる。

『フウー、フウーツ……！』

「……………」

臀部を床に落とした態勢から立て直し、ナイフを構えた。

袋小路に追い詰められてしまった。戦うしかない。

こんな所でくたばれない。約束を守るまでくたばつちやいけないんだ！

そんな覚悟を胸に合間見える。

しかし現実是非情、このモンスター相手にLv. 1の僕の攻撃は通らない。

諦めずただひたすらにナイフを振り下ろすが弾かれる。

「切れない……………なら……………！」

ナイフを両手で構えてミノタウロスに特攻。

なけなしのステイタスをフル活用する。

繰り返すが現実是非情である。

安物のナイフ（でもローンがある）はミノタウロスの肉体に半分も刺さることなく折

れてしまった。

武器は、ない。

ドンツと背中が壁にぶつかる。

来てしまった、行き止まりだ。

袋小路の奥にとうとう僕は追い込まれた。

僕の目は蹄を振りかぶるモンスター姿を映す。

次の瞬間、その怪物の胴体に、胸部に剣が生えた。

「え？ け、剣？」

『ヴお？』

何が起こったのか全く理解出来ない僕とミノタウロスの間抜けな声。

『グブウ!? ヴウ、ヴウモオオオオオオオオオオオオオオ——!?!』

断末魔が響き渡った。

剣が引き抜かれ血が溢れ出し、ついさつきまで僕を殺しかけていたモンスターはあつけなく灰となった。

その剣が引き抜かれたことにとって溢れ出た大量の血のシャワーを全身に浴びて、僕は呆然と時を止める。

「……ぼ、冒険者……？」

牛の怪物に代わって現れたのは、あまりにもみすぼらしい男だった。

身に纏う装備は角の折れた鉄兜と薄汚れた軽鎧に、鎖帷子。

左腕に小振りな円盾を括り付け、右手にはミノタウロスを貫いたばかりの装飾のない無骨な剣を携えている。

「無事か？」

「あ……… はい……… あの、あなたは？」

「………  
ゴブリンスレイヤー  
小鬼を殺す者。」

それが僕と、あの人の、最初の出会い。